

虚構に賭けた男 —Psalmanazar の “An historical and geographical description of Formosa...” —

吉 田 邦 輔

Disraeli といえ、かつてヴィクトリア女王治下の英国で政界、文壇の両面に活躍した Benjamin— 後の Lord Beaconsfield が先ず思い出されるらしいのであるが、彼の父親たる Isaac Disraeli もまた稀代の好事家として— 作家としての彼には、東洋をテーマに英語で書かれた小説としては最初のものといわれる “Menjnoun and Leila, the Arabian Petrarch and Laura” などという作品が有るにはあるが、たいしたものではない— 記憶されていい人物であろう。ディレクターとしての彼の面目を遺憾なく發揮した著作として知られている “Curiosities of Literature” は 1791年、93年、1817年、23年、34年と次々に書きつづけ出版されたのであるが、正史からは置き去られた歴史の裏道、かくされた逸話、書物に関する綺談、文芸批評などを書きのこしたもので、流石に面白いし、縁蔭の下、または炬燵に足を突っ込んで読むには最適のものといってもいいだろう。但し、本館の所蔵しているものは、ロンドンで出版された改訂第14版を底本とした W. J. Widdleton社 1871年刊行のアメリカ版4巻ものである。この本はその性質上おそろしく沢山の項目が挙げられているのであるが、一項目あたりの文章は比較的短かいものが多い。その第4巻に “Literary forgeries” と題された項目があって、その中に「最も変わった贋本づくりとしては、当今文学界でよく知られている “An historical and geographical description of Formosa...” で、しかも George Psalmanazar

という、仮名しか未だにわからないままの、この著者を筆頭に挙げなければなるまい……」と特記して、その内容を一応紹介し痛罵している。この Psalmanazar という名前も、彼の死後、即ち、1764年に出版された “Memoirs of ... Commonly known by the name of George Psalmanazar” によれば、旧約聖書中の “The Second Book of Kings” の第17章第3節にあるアッシリアの王 Shalmaneser からとったというだけで、彼の本当の名前や生地については、現在でも何も解らないままなのである。そのスペリングも、1704年の初版本、1705年の改訂第二版、何れもその表題紙には Psalmanazaar となっている。それはともかく、Disraeli は本書を “Literary Forgeries” の一つとして扱っているが、いったい Forgery とはどのような意味なのであろうか？ 書名だけは伝わっているが、その書物自体は、既に散佚消滅してしまっているようなものは、東西古今を問わず数えきれないほど多い。それを、あたかも今発見したかのように偽造して発表したような書物は— これもおびただしい数に上るであろうが— 確かに Literary forgeries という概念に入るものと言えよう。しかしながら Psalmanazar の “Description of Formosa” は、そのようなものとは類を異にしているのである。台湾という実在している現実に対して、彼は全く自分の脳裡に浮んだ土地と人間と社会とをもって覆い被せたのであって、彼の創作であることには間違いない。Thomas More の

“Utopia”, Samuel Butler の “Erewhon”, Jonathan Swift の “Travels into several remote nations of the world” —著者は Lemuel Gulliver となっている—などと比較したならば、大方のお叱りを蒙るであろうが、その内容においては雲泥の差のあることは、勿論肯定するとしても、形式的には似たりよったりといっても、あながち牽強附会とはいきれないのではなからうか。大分以前のことになるが、芥川竜之介が「きりしとほろ上人伝」を発表したとき、これを自分の所蔵している切支丹版「れげんだ・おうれあ」の中におさめられている話の一つだと、態々小序をつけて世人を驚かせたことがあった。これは十三世紀のころジェノアの司祭 de Voragine の手になる「聖者行伝」とでもいべき “Legenda aurea” という本が実際に存在しているので、その切支丹版などと、如何にもありそうなものに仮托しただけに、一杯喰わされた経験が筆者にもあるのであるが、「ぎあ・と・べかあどる」とか「どちりな・きりしたん」とか、あの切支丹版特有の文体を巧みに模した彼の文章と「あんちおきやの帝」とか「珍陀の酒」とか、何となくエクゾティシズムを唆る言葉に好奇心を駆りたてられて、正宗教夫氏ら編輯の「日本古典全集」に収められていた、切支丹版の翻刻本を読み耽ったものである。ところで話を Psalmanazar に戻すことにするが、若し彼がその “Description of Formosa” を書くに当って、彼なりの理想をもって当時の英、仏、和蘭諸国の政治、社会の批判を意図していたものとしたら、彼に対する評価も相当変わったものになったことであろう。政治観、社会観、文明批判的精神の欠如、それが彼の致命的欠陥である。台湾という実在する土地と人間の上に、彼が脳裡に画いた空想の網を被せるには、彼の空想は余りにも小さ過ぎたし、また

未開の国という観念にとらわれすぎたといえるのではなからうか。彼について最も詳しい解説が見られるのは “Dictionary of national biography, ed, by Leslie Stephen. Lond. Smith, elder, &c. 1885” なのであるが、余り好意的に扱ってはいない。大体において、彼に関する記述の見られる資料は、甚だ少ないのである。その極めて少ない資料の何れもが、彼をまず Literary impostor と呼んでいるのである。この impostor という言葉を、英語辞典に示されているように「詐欺師、ペテン師」と訳しては、いささか酷にすぎるような気がするのである。Isaac Disraeli なども Psalmanazar の “Description of Formosa” に挿し画として示されている Formosa の王、副王、王妃、貴族夫妻、一般市民男女、農民男女の風俗—確かに珍妙なのであるが—はいうに及ばず、礼拝堂、祭壇などについても「何という馬鹿ばかりしい作りごとか」と罵倒している。確かにそれには相違ないのであるが、だからといって、1704年に出版された “Description of Formosa” については既に1711年3月16日発行の “Spectator” 誌第14号に April fool をあてこんで掲載された広告「来たる四月一日へイマーケットの劇場において “残忍あくなきアトレウス” と題する歌劇を上場つかまつるべく候。なおなお、ティエステスが己が子供を相啖うという見世場は先頃台湾より御当地にお目見得致したるかの呼び声高き Psalmanazar 氏が相つとめ申すべく候……………」が出てからというもの、彼が隠遁生活にかくれてしまったのであるから、彼の台湾誌が、空想の産物であることぐらい、英国の文壇では周知のことであつたらう。Disraeli が何も1781年以後に—Psalmanazar はクラアクンウェルのオールド・ストリート街アイアンモンガー町で1763年5月3日84歳で死歿している—出版さ

れた“Curiosities of literature”の中で、口を極めて罵倒するにも当たらないのではなからうか。ましてや Disraeli に Psalmanazar のようにロンドン主教 Henry Compton に Church of England のカテキズムを台湾語—この台湾語と称するものも、彼が勝手に造り出したもので、20の文字から成りたっているのであるが—に翻訳するなどという芸当は出来そうにもないのであるから。彼の造り出した台湾語の出来栄については、あの東洋語学者の Delacouperie が「Psalmanazar の“Description of Formosa”に紹介されている台湾語というものは、いちがいに彼がかってに造りだした仮空の言語とのみはいい切れないものがあるのである。その証拠としては……」として、Auer の台湾語による「主の祈り」を挙げて、一時、世評を改めさせたのであるが、やがてこの Auer の台湾語訳 Paternoster は“Description of Formosa”—初版本では後段の第27章、改訂第2版本では Book one の第30章—の“Of the language of the Formosans”に出てくる“The Lord’s Prayer (台湾語訳では、Koriakia Vomera)”をそっくり引き写したものであることがわかったので、元の木阿弥になってしまったとはいうものの、相当よく出きているものらしい。何ともそそかしい教授がいたものである。事のついでにこの「主の祈り」の英文と、Psalmanazar の台湾語訳とを、ここに挙げておこう。

英文：The Lord’s Prayer. “Our Father who in Heaven art, Hallowed by thy Name, Come thy Kingdom, Be done thy Will as in Heaven, also in Earth so, Our bread daily give us to day, and forgive us our trespasses, as we forgive our trespassers, do lead us not into temptation, but deliver us from Evil, for

thine is the Kingdom, and Glory, and Omnipotence to all ages. Amen.”

Psalmanazar の台湾語訳：Koriakia Vomera. “Amy Pornis dan Chin Ornio vicy, Gnayjorhe sai Lory, Eyfodere sai Bagalin, Jorhe sai domion apo Chin Ornio, kay chin Badi eyen, Amy khat-sada nadakhchion toye ant nadayi, kay Radonaye ant amy Sochin, apo ant radonef amy Sochiakhin, bagne ant kau chin malaboski, ali abinaye ant tuen Broskaey, kens sai vie Bagalin, kay Fary, kay Barhaniaan chinania senda-bey. Amien”

そのほか、使徒信条、十誡の英台対訳が本書に載せられている。残念ながら筆者は言語学には疎いので、この Psalmanazar の造り出した台湾語なるものの巧緻さについて云々する知識は持ち合わせていないのであるが、のちにポーランドの Zamenhof が Esperanto を発表したのは1887年であるから、多少その先駆者の榮譽を彼に与えてもいいのではなからうかと思うのである。十八世紀英文学界の大立者でしかも辞書きちがい—lexicographer—として知られている Samuel Johnson が、後年すっかり行ないすましている Psalmanazar について並々ならぬ賛辞を呈していたことは—もっともこの Samuel Johnson なる人物が相当にあくの強いひと筋縄ではいかなない代物なのであるが—彼の忠実な崇拜者 Boswell のジョンソン伝からも知ることが出来る。更に、Piozzi 夫人の伝えるところによれば、「この二人は毎晩のように Old Street にある飲み屋に出かけては麦酒を酌み交して雑談にふけていた」ということである。Johnson のように傲岸不遜な人物が、それまでにして Psalmanazar との交際をあえて求めた本心は何であったのか、色々考えさせら

れるのであるが、Psalmanazarの新言語創造力の秘密に対する興味が、その主たるものであったのではなからうか。それに加えて、彼の死後発刊された“Memoirs of …… Commonly known by the name of George Psalmanazar”の執筆に際しては—Johnson が相当に加筆したというのが定説であるが一助言をあれこれと与えながら、Psalmanazar がどうしてもあかさなかつた彼の本名と出生地とを何とか知りたいという Johnson の欲望が、そのような態度を取らせたのであろう。Piozzi 夫人は「……二人の間に信頼感があったとはいえない」とも述べているのである。この二人のそれぞれ思惑を胸に秘そめながら、どのような会話を交していたことか、遺憾ながら今さら知るすべもない。前にも少し触れたのであるが、Psalmanazar に関する記述の見られる資料は極めて少ない。その少ない資料でさえ、例えば、Kazlitt Arvine 編纂の“The Cyclopaedia of anecdotes of literature…”, Abraham Rees 編纂の“The Cyclopaedia; or, universal dictionary of arts, … and literature …” にしろ、また、David Patrick 編纂の“Chambers’s Cyclopaedia of English literature …” また前に紹介した Psalmanazar に関して最も詳しい記述の見られる Leslie Stephen の“Dictionary of national biography” にしたところで、彼の経歴について拠るべき種本は、彼自身の“Mémoires of … Commonly known by the name of George Psalmanazar” 以外にないのであるから、その記述たるや何れも似たりよったりである。Britannica や Larousse に至っては、ほんの数行しかその解説にあてていない。しかもその何れもが、恰かも修身の先生が、ちょっとした嘘をついた生徒に訓戒を与えるような、大人気ない叱りかたをしているのである。彼がこのような著作を行なった動機に対

する洞察、またその初版出版当時、忽ち売り切れてしまったほどの好評を博させた、ロンドンの文壇と社会の風潮などと関連させて解説を試みているものなど、皆無なのである。

ところで、よもやと思ったのであるが、この Psalmanazar の“Description of Formosa”を扱った日本人の著述が二つあることが、色々調べているうちに解って来たのである。その一つは、伊能嘉矩著「台湾文化志上、中、下 3巻、東京刀江書院昭和3年」である。伊能嘉矩氏は岩手県遠野町の出身で、同氏の経歴については、本書の上巻に、故板沢武雄教授が詳しく述べておられるので省略するが、29歳のとき即ち明治28年渡台されてから、大正14年59才遠野町で歿せられるまで、30年の長きに亘って、台湾の研究に没頭された篤学の士である。本書はその研究の結果の集大成ともいふべきもので、福田徳三、柳田国男両氏の仲介によって、当時の帝国学士院の推せんするところとなり、東照宮三百年祭祀年会から出版補助費を受けて、刊行せられたものである。その博学多識たるや、全く以って驚くべきものがある。特に中国資料からの引用は、殆んど完璧に近い精密さだといわれている。それに較べると欧米関係資料については、福田徳三教授もその「台湾文化に序す」の中に「若し強いて備はるを求むるならば……補訂修正の望ましいところはないとはいへまい。殊に西洋人の手になれる諸文献の涉獵に至っては、若干の足らざるものあるを見出さぬとも限るまい」と、ほのめかしておられるのであるが、筆者もまた同感である。Psalmanazar に関する叙述が見られるのは、下巻の第13篇「外力の進漸」の項である。本書の中で特に Psalmanazar の“Description of Formosa”を採り上げた理由としては「……清領以後一時台湾は彼等

一歐人一の眼界外に放置せられたやうに見えた。然も近世再びその注意を台湾に向はしめたのはマルコポーロの紀行文、サルマナザールの台湾紹介等が与かって力があつたとて、先ずサルマナザールを第一章に置き……」云々と述べている。Psalmanazar にとっては、望外の過大評価であろう。以下ブサルマナザールの経歴について紹介しておられるのであるが、多少外国資料との相違点が見られるものの、大体において似たりよつたのである。しかも“Description of Formosa”の内容を要約紹介しておられるのである。そして最後に「……台湾を以て日本の属領なりと断定したるが如き、畢竟過去における日台連鎖の史動を把握し、日本人の台湾に占めたる勢力の優越を認めし結果に外ならざるべきも、予め夙に将来の勃興の氣運を洞察せしに因るとも見るべくして、必ずしも一縷の明なしと為すべからざるものあるなり」と、ひどく気に入られておられるのであるが、これには閉口せざるを得ない。もしこの“Description of Formosa”を虚心坦懐に予見も偏見もなしに読むならば、われわれ日本人は中国出身の皇帝に支配されている、とんでもない野蛮人と受けとられてしまうことになる。更に伊能氏は、本書の第12篇「商販沿革」の第5章「通貨」においても、その冒頭に「ブサルマナザールの著台湾地理歴史の中に貨幣に関する一章あり。台湾住民の間に、金銀銅及び鉄の各種より成れる固有貨幣の使用せらるる事を言へり。是れ因より無稽の記述に過ぎざれども……」と態々紹介し、台湾紋銀、永曆通宝とともに、Psalmanazar の造り出した奇妙な形をした台湾通貨の図がのせられている。大変な力の入れ方であるが、このような記事が散見するので、この上、中、下3巻からなる膨大な本書を、読むにたえるものとしているとも言えよう。ここで問題となるのは、伊能氏が、何

処でこの“Description of Formosa”の1704年の初版本、1705年の改訂第2版本を入手されたのかということである。まさか台湾総督府がこのような本を購求していたとは思っていなかったのであるが、たまたま、昭和5年は和蘭陀人が台湾に渡来して安平に Zealandia 城を築いてから、丁度300年に相当するといふので、盛大な記念式典が催されたのであるが、その行事の一つとして、官幣中社南神社内北白川宮殿下御遺跡所を式場に、史料展が開かれた。その史料展の目録が「台湾史料集成」として、昭和6年に刊行されたのである。その目録を見ると「書冊の部に、

サルマナツアル台湾誌 1冊 台湾総督府
図書館蔵

(An Historical and Geographical Description of Formosa)

著者 サルマナツアル (Psalmanazar)
著者は「文壇の偽り者」として有名なる自称日本人なり。

発行所 倫敦

発行年 1704年

解題 著者がその生ひ立ち及び経験談を「ラテン語」にて記したるを「オスワルド」之を英訳し1704年倫敦にて出版せるものなり其の内容の大部分は荒唐無稽なるに拘らず翌年之が再版を見更に又独訳、仏訳も出づるに至れり

陳列せる三種のうち

(イ)は1705年倫敦出版の再版もの

(ロ)は1764年倫敦出版のもの

(ハ)は1708年「アムステルダム」出版の仏訳もの

と記載されている。従つて伊能氏は、総督府に在任中“Description of Formosa”を實際に手にして、相当大きな感銘を受けられたのであろう。福田徳三教授の指摘された通り

「西洋人の手に成れる諸文献」の使われ方には瑕瑾なしとはいえないが、一引用された著者の選び方、人名の読方、特に十八世紀の初期の活字ではbとhとが紛らわしいのであるが、丹念に読み違えておられる—それにしても、これほど台湾関係の資料を駆使集大成したものは外にはない。貴重なものであろう。

今ひとつ、こと Psalmanazar に関する限り、是非とも挙げておかなければならないものがある。それは、「神に許しを」と題して、別冊「文芸春秋」107 特別号に発表された作品である。作者は陳舜臣氏で、この作品は氏の直木賞受賞後の第一作とのことである。この Psalmanazar を主人公にした文学作品は他にはないのではなからうか。この“Description of Formosa”という全く虚構の書についての解説を試みようとする、その生地も本名も—その“Memoirs...”においてすら、またあの詮索ずきの Johnson に対してすら—結局何ひとつうちあけることをしないで死んでいった Psalmanazar とは、どういう人物であったのか、甚だ興味を惹かれるのである。「売名欲にかられて…」というようなありきたりの解釈では、何の説明にもならないと感じさせる何ものかが、彼にはあるように思われるのである。その点、陳舜臣氏の作品は、見事にこの人物を浮き彫りにして見せているといえるのではなからうか。本稿は、彼の伝記を書くことを目的としているわけではないのであるが、“Description of Formosa”を上梓するに至るまでに彼の経てきた道に、多少なりともふれておかないわけにはいかないので、陳舜臣氏のこの優れた作品の驪尾につきながら、簡単に紹介していくことにする。Psalmanazar は、1679年か1680年に、いわゆる Languedoc —いましてし範囲を縮めると Midi —と呼ばれる南フランスの、それもローマからアヴィニョンへ通じる街道すじ

の、何処かで生れたものらしい。“Dictionary of national biography”によれば、彼のフランス語には、多少、ガスコーニュ訛りがあったといっている。6歳ぐらいのとき、生家の近くで二人のフランシスコ派修道士がひらいていた寺小屋で、はじめて教育をうけ、つづいて、ドミニク派の小さな修道院の司祭がひらいていた学校に学び、何という大学かはわからないが、ともかく、ある神学校に入って講義をきいたのであるが、その講義があまりにもつまらないというので、退学してしまった。しかし、彼の語学に対する才能は、その頃からすでに芽生えていたらしく、特にラテン語には極めて堪能であつたらしい。その後あれこれと伝てを求めて家庭教師をしてはみたものの、子供の出来がひどく悪かったり、その子の母親から桃色遊戯をしかけられたり、というわけで、どれもうまくいかず、母親の許に帰ることにした。この桃色事件について、彼が道心堅固に「肥りぎみの御亭主をもった陽気な妻君」の管掌に応じなかったのは、より学問があり、より純情な青年と思われたいという彼の虚栄心がそういう態度を取らせたので、後の彼の行状と思ひ合せてみるに、現代の精神分析学者に好個の材料を提供するであろう。と、1926年に“The library of impostors”の第2巻として Psalmanazar の“Description of Formosa”を米英両国で、限定版として七五〇部を、ロンドンの Robert Holden & Co. Ltd. から出版した編輯者 N. M. Penzer は、その Introduction の中で述べているが、いささか早計であろう。それはさておき、失職した彼は母の許に帰るべく、自分を宗教上の問題のため故国を離れた「アイルランド生れの青年神学者」という名目でパスポートの交付を受けた。が母親も不如意がちなので、500哩もはなれたベルリンの父親を訪れることにしたものの、旅費はな

し、近くの教会から托鉢用の僧服を盗み出し、ローマへ向う托鉢修行僧になりすまして、途中ラテン語しか喋らず、地方の牧師や物もちから喜捨を受けながら、ようやく父の許に辿ついた。が、その父もすっからかんときているので、永く滞在するわけにもいかず、ドイツやオランダ地方を放浪して歩いたのである。このとき一六歳だったと彼は自分でいっているが一はじめて、以前耶蘇会士たちからきかされたことのある、日本についての話を思いだした揚句のはて、今後はキリスト教に改宗した日本人として押し通そうと旅券もそのように改造してしまった。Psalmanazar が一六歳だったとすれば、一六九四年か一六九五年ということになる。Ignatius L. Loyola や Francisco de Xavier などが宗教改革によって失なったカトリックの失地回復を目的として、耶蘇会を結成したのは一五三四年のことで、結婚問題に絡んで英国王ヘンリー八世を破門した法王パロウ三世がこの耶蘇会を公認したのは一五四〇年であるが、一五四九年(天文一八年)には早くも、その創設者の一人、Francisco Xavier が印度のゴア、セイロン、モルッカなどで布教に従事した後、日本人アンジロウの案内で鹿児島に上陸してキリスト教を伝えている。それから算えてPsalmanazar が「日本人」と名告る決心をした一六九四—九五年までには、ほぼ一世紀半の時が経っている。その間数多くの耶蘇会宣教師が来日して、布教活動に従事しているのであるが、これに触れることは、大分本稿の目的範囲から逸脱してしまうことになるので省略することにして置く。これらの耶蘇会士たちは、色々とその布教活動について本部に報告しているし、一五八二年から九〇年にかけては、九州の切支丹大名が派遣した少年使節たちが、はるばるローマの法王庁に詣でている。このような事は、当時においても相当な News

Value を持っていたものであろうと思われるのであるが、如何なものであろうか。

特に一五九〇年に第二回目の来朝をしたヴェリニアニの如きは、はじめて印刷機を日本に持って来て「さんとすの御作業の内抜書」を皮きりに、約二九種ほどの切支丹版が刊行されている。幕府の高官たちが「オランダ風説書」を手にしたのは一六七五年のことで、これはオランダ商船から長崎奉行に提出された海外情報とでもいうべきもので、通詞が翻訳して幕閣に提出したのであるが、一八五八年頃まで続けられている。織田信長の下に、活発な布教活動を行なった耶蘇会の宣教師たちも、その最大の後援者が本能寺の変で倒れてしまうと、その後継者秀吉が、一五八七年突然九州で禁教と宣教師追放令を出してからは、受難の道を進むことになった。一五九七年には長崎で有名な二六聖人の殉教が起ったし、また江戸幕府になってからでも、一六一四年にはキリスト教禁圧令が発布され、宣教師たちはルソンに追放されてしまった。更に、一六二二年には長崎で使徒五二人の殉教事件が起っており、踏絵令が発布され、キリスト教徒に対する迫害は益々苛烈となり、一六三七—三八年の島原の乱以後は禁書、鎖国政策が徹底して、一八五八年(安政五年)の開国まで、わずかに所謂「隠れ切支丹」が細々とこのころだけになってしまった。切支丹迫害史を長々と述べることは本稿にとっては全くお門ちがいののであるが、このような度重なった宗門の大事変が、マカオやゴアを経て法王庁に報告されていないわけではないし、欧羅巴社会に伝わっていない訳はないと思われるのである。そうとすれば、髪の色も眼色も、また皮膚の色もまるで違っているPsalmanazar が突然日本人だと名告ったところで、直ぐにばれてしまうのではなからうかと思つたのであるが、そうでもなかったところを見ると、ジェスイットの高級司祭た

ちを別にすれば、幕府の鎖国令発布以来、Psalmanazar が日本人を名告るまでの四分の三世紀間に、オランダを除く他の欧州社会では日本も東の果の霞の中に臚ろげにしか知られていないようなありさまになってしまっていたのであろう。話を Psalmanazar にもどすと、彼はジェスイットの宣教師たちから日本の歴史や地理について聞きかじった知識をもとにただで「日本人として通す」のに十分だと考えたらしい。それで彼はドイツ、ブラバント、フランドル地方を放浪したのであるが、蚤や虱み一杯たかったぼろぼろの着物をまとった彼のパスポートを調べようとするものなどいなかったのに、彼は一生懸命、自分の変造パスポートを人に見せようとしてめいている。まわりの人たちは彼を、当時、大きな都市に流れこんでいたラガマフイン—現在東京の盛り場にうろうろしている汚ないヒッピーみたいな連中なのであるが—の一人としかみななかったらしい。彼の汚なさといったら、「当時、街の中を嫖客を求めてうろつきまわっていた Beguine—江戸時代の比丘尼のような売春婦—でさえ、彼には声もかけなかった」というくらいである。やっこのことでリエージュに着いた時には、もはやにっちもさっちもいなくなったので、もともと嫌いではあったが、他に方法もないので、彼はやむなくオランダの軍隊に入隊した。兵員登録係の親切な将校のおかげで Aix-la-Chapelle にコーヒー店や撞球場をやらせて貰ったが、何れもうまくいかず、またもやその将校の世話で、彼の率いる中隊に入れてもらった。その連隊はメクレンブルグ侯の麾下に属していて、兵隊の多くのものはルーテル派であった。この時も彼は「日本人にして異教徒、Salmanazar なる名前を以て本中隊に入隊す」と、そのまま、ロンドンに行くまでそれで通している。彼の中隊はまもなくオラ

ンダに駐屯することになったのであるが、この兵隊生活の退屈な間に、彼の“Memoirs...”からの引用によると、「自分を日本人だと名告ったわたしの気まぐれは、段々昂じてしまって、わたしは自分で本をつくり、太陽、月、星などの像を画き、そのほか空想の赴くままに色々画き出し、わたしの発明した文字で詩句を並べて、気のむくままにそれを読みあげたり吟誦したりした」と述べている。人に優れたラテン語を使って、他の兵隊たちと宗教問題を論じあったが、哲学や論理学の知識のおかげで決してひけをとらなかつたということである。1702年の終りごろ、彼の連隊はオランダのスロイスに移駐したが、そのとき、彼の奇矯な振舞いがスロイス市長の職も兼務していた George Lauder 少将の目に止まり、隊付きの将来たち、ウォールン人教会の司祭 Isaac Amalvi (Amalvy.), それに当時スロイスに駐屯していたスコットランド連隊付き従軍牧師 William Innes らの前に Psalmanazar を呼びだして、色々問い正すことになったのである。この会合で Amalvi と Psalmanazar との間に宗教問答が行なわれたのであるが、結果的には Psalmanazar の方が分があり、彼の言い分が一応列席者の多くから認められたというのだから驚くほかはない。ウォールン人の教会は元来旧教に属しているので、当然耶蘇会士の報告などについては一般人々より詳しい管の司祭 Amalvi が、素人じみた Psalmanazar を論破できなかったとは不思議な話である。祭するところ、ラテン語、ドイツ語に堪能な Psalmanazar が一方的にまくしたてて、Amalvi には反論の余地がなかったのであろう。Amalvi は後になって Psalmanazar の議論に対する反駁を出版している。この席上で、Psalmanazar に偽わりの匂いを嗅ぎつけたのは従軍牧師 William Innes ただ一人で

あった。「人間の額には、限られた少数の同類にしか見えない烙印が捺されているのだ。イネスはサルマナザールの額に、それらしい烙印を認めた」と陳舜臣氏は描写しておられるが、正にその通りであろう。この William Innes という牧師は、全くもってぶうぶうしい、心からの悪党だったらしい。「僧服をもってつむには最もふさわしからざる人物」ともいわれている。1726年の事であるが、スコットランドの牧師で Archibald Campbell という青年が「徳性の起源について」という原稿を持ってロンドンにやって来て、その原稿を「同郷人で兼て知り合い」の Innes 師に預けておいた。この Alexander Innes 師—William Prideaux Courtney の “The secrets of our national literature: Chapters in the history of the anonymous and pseudonymous writings of our Countrymen. Lond. Archibald Constable & Co. 1908” から引用しているのであるが、Alexander Innes とあるのは誤りであって、William Innes の方が正しい—というのはしたたかもので、当時ウエストミンスターの聖マーガレット寺の副説教師をつとめていたのであるが、あの Psalmanazar を英国に連れてきた張本人である。彼はその原稿を自分のもののようにして、“*Απερηλύοια*, または、徳性の起源について” と題して、1728年に、国王と大法官への献辞を加えて出版した。そのおかげでエセックス州ラグネスの教区牧師に任命されたのである。Campbell がそれに気がついたのは二年も経ってからのことであるが、Innes と対決して慄え上がらせたといっている。ひと騒ぎ持ちあがったのであるが Innes の親戚の女王付医者 Stuart 某が中に入り、「ある種の理由によって本書が Innes の名前で出版されてしまった」旨の広告を出すことで和解がなりたったものようであ

る。後にこのような醜悪な事件を惹き起したほどの人物だけであって、Psalmanazar が日本人でないぐらいのことは直ぐに見破ってしまったものらしい。Psalmanazar の台湾語なるものも、その真偽を確かめる方法など簡単至極なことであろう。比較的長い文章をいわゆる台湾語に訳させ、間を置いてもう一度訳させてみたら大概の場合すぐに露見してしまうだろう。Innes が Psalmanazar を試した場合にも同じ方法を用いたのであるが、ただ彼は Cicero のの中から試しの文章を選んだ。こうして自家薬籠中のものとした Psalmanazar に Innes が要求したことは、単純に日本人であると名告ることをやめて、日本人ではあるが、台湾生れの台湾育ちにすること、耶蘇会の宣教師に台湾から Avignon に連れ出されてローマン・カソリックに入信するように強要されたが肯んじなかったために宗教裁判で拷問にかけると威嚇かされたのでドイツに逃げ、そこでこの Innes 師の努力によって英国教会に改宗したということにすることであった。切支丹は禁圧されていたとはいうものの、オランダとの交易はまだ続けられており、渡航来日の経験を持った水夫の数も段々増えていったことであろうから、日本に関する知識も漸次広まっていったであろうことは十分に考えられるのであるが、台湾についての知識は殆んど皆無に近かったので、Innes の心配は尤も千万のことである。次に Innes の演出したのは、公衆の面前でこの台湾生れの日本人と名告る異邦人、しかもジェスイットからのがれて英国教会に改宗した Psalmanazar に洗礼を施し、それまでの経緯と自分の努力についてこまごまとロンドンの主教に報告することであった。当時のロンドンの主教コンプトンはこの Innes の報告をすっかり真に受けて彼らをロンドンに招いたのであった。それで彼は連隊の兵役から解放され

て1703年の終りごろエセックス州のハリッジ (Harwich) に上陸した。ロンドンに到着するや否や、彼が世人の評判的になったことはいうまでもない。彼は Compton 主教に英国教会のカテキズムの台湾語訳を献呈している。また Tillotson 主教とは流暢なラテン語で会話を愉しんだ。主教や英国教会関係僧職者たちは彼のために寄金あつめまでやったのである。それだけではなく、科学者たちもこの未知の台湾という土地について、またその台湾語について興味をわきたたせた。耶蘇会の宣教師で支那で布教活動に従事した Fountenay 師はたまたまそのときロンドンに滞在していたのであるが、流石に Psalmanazar のいうことが実際とは違っていることに直ぐ気がついた。が、Psalmanazar は彼との対決を1704年二月二日に開かれる Royal Society 一正しくは、The Royal Society of London for improving national Knowledge であるが、1660年に創設された一の公開講演で行なうことにした。1703年といえあの Isaac Newton がその総裁に就任しているの、この Psalmanazar と Fountenay との公開論争も彼が総裁の時に起った事件であろう。この公開論争においても、慎ましやかで物静かな耶蘇会の宣教師 Fountenay よりも、ラテン、英、独、仏の語学に通じ、しかも一旦こうといいたしたが最後、決してそれを訂正しようとしないう奇癖を持った Psalmanazar の方に分があつたらしい。Charles Dickens が“The Mudfog and other sketches”を発表したのは、この公開講演から一世紀以上も後のことなのであるが、その中に“Full report of the fist meeting of the Mudfog Association for the Advancement of Everything”と題した作品が“Sketches by Boz”の中にある。勿論当時の学会の議事を Dickens 流に戯画化したものであるが、この

Fountenay と Psalmanazar の公開論争という言葉を見たとき、筆者は何となく昔よくよんだこの Dickens の作品を思い出してしまったのである。Royal Society の事務総長 Hans Sloan はそれから八日後の2月20日論争当事者二人を主客に晩餐会を催したのであるが、列席した招待客の中にいた Pembroke 伯 が Psalmanazar に興味を感じたらしく、甚だ寛大なパトロン役を引き受けてくれるようになった。当時のロンドンの社交界の大立ても Pembroke をパトロンに持つてからは、彼の人気たるやすばらしいものであつたらしい。“Gentleman's Magazine”誌の記事によれば“王国内で催される大晩餐会に彼の姿を見かけないことはない。”という程であつたらしい。しかも彼は晩餐会の席で何時も彼の台湾語なるものを披露して廻つたらしいのであるが、Richardson はその“Languages of the East”の中で一大分あとの話しであるが—「それは (Psalmanazar の台湾語) 博識な学者たちでさえもすぐ信じこまされるほど、斬新、それに覚え易く、また法則性を持っていた」と述べている。Compton 主教などは知己を語らって、金を集め、Oxford の学寮に六カ月間一室を貸与したのであるが、これは、「後に台湾の人たちを英国教会に入信せしめるため布教におもむく学生たちに、台湾語を教えるように」と考えたのであろう。Psalmanazar はこの間、はっきりなしに催された講演会などに出席しては大いに喋舌り廻つたらしいが、大変な人気で、特に女性には大いにもてたらしいのである。この Psalmanazar に対する人気の上昇と期待のふくらみを見た Innes は、Psalmanazar に Bernhardus Varenius の“Descriptio Regni Japoniae et Siam. Amsterdam, 1649”と Rev. G. Candidius の“A short account of the Island of Formosa. Frankfurt am

Main 1649' を貸しあてて、この二書をもとに、ニカ月以内に自分の生いたちと、台湾の地理、歴史について書物を作るようにすすめた。Candidius は 1627年から1631年まで、また 1633年から 1637年までの二回にわたって、実際に台湾に在住して熱心に布教に従事した人であり、原住民からも深く敬慕されたオランダの宣教師で、あの日月潭も Candidius と呼ばれているくらい人望を集めた人らしい。こうして彼の著書“An historical and geographical description of Formosa, an Island subject to the Empesor of Japan ...”が1704年の末に出版された。台湾生れの日本人であることを周囲の人たちに自然に意識されるため、生肉をそのまま喰べたり、何日も寝ないで勉強しているように見せかけるために態々椅子の上で寝てみたり、とかく奇矯に見える行動が彼には目立って来たのであるが、これとて、台湾生れの日本人たることを自ら証明しようとする彼としては死にもものぐるいの努力であったことであろうと思うと、筆者などはいささか物悲しさを感じるのであるが如何なるものであろうか。この本は大当りに当たったというのであるが彼の手に入った金は僅か10ギニーにすぎなかったという。同年にアムステルダムで“N. F. B. L. 氏と称する訳者名で、この仏訳が出版され、1716年には Frankfurt でその独訳も出版された。彼が人々の間で台湾事情を喋舌っている間はたんに聞き放しのまま過ぎていった疑問も、いったん書物の形で提供されるとなると、追求はきびしくなって来る。それで書肆からの要請もあり、翌1705年に、投げかけられた多くの疑問に対する解答を序文第二として付け加え、第二版が出版された。その間に彼の現世的処生術指南役たる William Innes は、Psalmanazar 改宗の功により、ポルトガル駐屯英国軍の従軍牧師長に任ぜられて国外に離

れてしまった。Innes に去られた彼は、まるで舵を失くした船のようなもので、急速に凋落してしまったのである。“Spectator”に本稿の冒頭に引用した悪戯の広告が出てから彼は世間からひっそくしてしまっただけであるが、時々雑文を書いては暮しをたてていたらしい。「愉しみと言へば、阿片を飲むぐらいのもので毎晩、匙で十杯から十二杯ぐらいも飲んだ時もあったが、自制して1パイントのパンチ酒に十から十二滴ぐらい混ぜて飲む程度にまで減らすことが出来た」と自分で述べている。彼はその大部分の時間をヘブライ語の修得にあてていたらしいが、天性語学の才に長けていたので、暫らくあとになると自由に駆使することが出来るようになったということである。その間彼は1712年頃 Patten-den 某の頼みを断わりきれず、「台湾白色絵具」というものを台湾特産品とって売り出したり、また家庭教師をしてみたり、絵扇の絵を書いたり、連隊書記をしたり、気ままに流されるままの生活をしてしたが、印刷師の Palmer に頼まれて「印刷史」一巻の著述に取りかかった。Palmer が途中で死んだので中断してしまった。しかし、後に Pembroke 伯の援助を得て1732年に出版にまでこぎつけている。とにかく、当時の水準からみれば彼の学識は相当高ものであつことは間違いないところなので、1735年から44年にかけては、これまた悪名高い Archibald Bower とともに —“Description of Formosa”の 1926年翻刻版の編纂者 N. M. Penzer は Bower を Bowen と誤っている—あの“Universal history”に寄稿を依頼されて、「ユダヤ史」、「古代ギリシャ史」、「ニュース及びトレビゾンの古代帝国」など相当多くの寄稿をしている。更に1747年には、Emanuel Bowen 編輯になる“A Complete system of geograpy...”にその台湾に関する部分を匿名で執筆してい

る。晩年の彼はひっそりと静かに暮していたらしい。以上簡単ながらこの奇妙な人物の経歴について略述したのであるが、彼の“Description of Formosa”の内容に触れる前に、今少し書き足しておかなければならない問題がある。凡そ英文で書かれた彼に関する記述には—そんなに多くもないのであるが—大体において、彼に対する嘲罵が彼のかくされた才能についての評価をおしついでにしているような感じがするのであるが、それは何故であろうか。Dickens の Sketches by Boz”に哄笑した英国の社会は、Psalmanazar の“Description of Formosa”に対しても、せめて微苦笑をもらすくらいユーモアは持ち合わせていても不思議ではないと思われるのであるが。その理由として考えられるのは、この“Description of Formosa”が、Psalmanazar の意図に反して、当時の英国社会の知性に対する軽蔑と、つまり、彼らの自尊心を傷つけられたと受けとられたからではなからうか。歐洲諸国の中でいち早く産業革命に入っていた英国では、既に1700年代の初期からその萌芽は現われてきていたのであって、英国社会もまた歐洲諸国の中で最先端をいっているという自負は十分に持っていたのであろう。だからこそ、Psalmanazar はフランスから逃れて英国に渡ったのであろう。ルイ十四世、十五世治下のフランスは確固たる王権のもとに絢爛たる宮廷文化を成熟させたのであるが、そのかげには、フランス一般市民、農民などが、王、貴族、僧職者の重みを支えるのに疲れきっていたのである。ましてフランスの Midi 地方の農民などは抜け出すことの出来ない重みに打ちひしがれていたのである。その重圧が Psalmanazar という人間を弾き出したのであろう。いまひとつ考えさせられることは、Psalmanazar に“Description of Formosa”を執筆させる際に William Innes

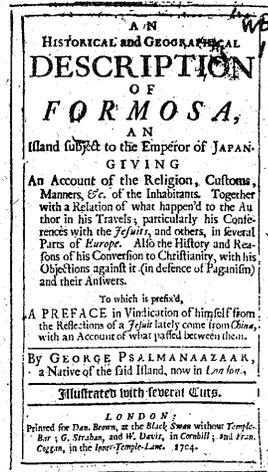
が G. Candidius の“A Short account of the Island of Formosa”を参考資料にするようにというので彼に与えたことは前に書いておいたのであるが、この Candidius について相当執拗に悪口を述べたてていることである。それは何故であろうか？ Psalmanazar は確かに台湾について、その歴史、地理、制度、風俗などを書きつづっている。そして台湾という土地は Psalmanazar とは何の関係もなく実在して、長い長い歴史を無縁につづけて来た。Psalmanazar の画いた台湾は彼の頭脳の中のみ存在しているのであって、実在している台湾など彼にとってはどうでもいいことなのである。彼にとっては、彼の台湾は自分の創造した台湾なのであって、細事に亘っても非常な具体性を持って彼の中に存在しているのである。それが如何に現実であっても、彼の脳裡にある台湾に存在しないものは、存在しないのである。Candidius が台湾について真実を語れば語るほど、Psalmanazar にとっては、それは異質のインヴェンダー—Psalmanazar の台湾王国を破壊しようとする敵にしか過ぎない。従って Psalmanazar が Candidius の悪口を繰返し述べれば述べるほど、それは Candidius の「台湾誌」が正しいことを証明しているものと考えてもいいのではなからうか。以上、無声映画時代の用語をかりるならば、いわゆる「前説」なるものがいささか長すぎってしまったのであるが、ここらで本題に入ることにする。

さてこの Psalmanazar の“Description of Formosa”であるが、本館に所蔵しているものは三種である。

- (1) 1704年刊行の初版本。
- (2) 1705年刊行の第2版。
- (3) 1926年刊行の翻刻版。

ところで、この本館所蔵の初版本の表題紙に、「明治十九年六月十三日寄贈 T. Hiraya-

ma]と赤インキで書かれている。この T. Hirayama というのはどうも平山藤次郎のこ
 とらしい。この平山藤次郎という人は、嘉永
 4年江戸に生れた旧徳島藩士で、はじめ藩命
 によって海軍兵学寮に入り、累進して海軍大
 佐となったが、日清戦争がはじまると、軍艦
 八重山の艦長として台湾征討に従事したが、
 敵将劉永福が英国商船に便乗して逃走するの
 を厦門に追いつめ臨検しようとしたため国際
 問題を惹起し、引責辞職してしまった。が、
 明治29年には商船学校長に任ぜられ、同
 校に帆船運用法を正科として設けさせた人
 物である。彼がどのような意図の下に、どの
 ような経路でこの本を入手したのか明らかに
 すべき方法とてないのであるが、彼の経歴か
 らみて一勝手な推測を許されるならば一或い
 は構構の書とは知らずして入手したもので
 はなからうかと思われるのである。時代が明治
 に代って幾らも経たないうちに、即ち明治七
 年に、鎖国以来はじめて兵を国外に出した
 が、その出兵の目的地は台湾であった。それ
 以来下関条約調印によって完全に日本帰属が
 認められるまで、清朝治下の台湾は日本朝野
 の人々に絶えず意識せられていたことであ
 ったろう。時代が時代であったことであるか
 ら、ましてやこの寄贈者平山藤次郎は海軍の
 軍人であったことでもあり、将来ことある時
 に備えてかねてから台湾の研究に務めていた
 と想像しても余り的外れとも考えられない。
 事実、平山氏はこの初版本をある程度まで読
 んだらしい、というのは、ところどころ赤イ
 ンクでアンダラインが引いてあったり、誤植
 や誤字一この時分の本には極めて多いのであ
 るが一を丹念に直したりしたあとが見られる
 のである。筆者の憶測が当たっていたとした
 ら、藤次郎先生さぞかしがっかりしたことであ
 ろう。さすがに半分ぐらいのところまで、読
 むのをやめてしまったらしい。饒舌はこい



初版本の表紙

らでやめて、本題にとりかかるとにする。

本書の書名は当時の習慣で甚だ長々しいのであるが、ここに原文のまま引用しておく。初版本のタイトルは〔上掲図参照〕

An/Historical and Geographical/Description/of/Formosa,/an island Subject to the Emperor of Japan./Giving/An Account of the Religion, Customs, Manners, Etc. of the Inhabitants. Together/with a Relation of what happen'd to the Au-/thor in his Travels; particularly his Confe-/rences with the Jesuits, and others, in several/Parts of Europe. Also the History and Rea-/sons of his Con- version to Christianity, with his/Objec- tions against it (in defence of Paga- nism)/and their Answers./To which is prefix'd,/A Preface in Vindication of himself from/the Reflections of a Jesuit lately come from China,/with an Ac- count of what passed between them./

By George Paslmanazaar, a Native of the said Island, now in London./Illustrated with Several Cuts./London:/Printed for Dan. Brown, at the Black Swan without Temple/Bar; G. Strahan, and W. Davis, in Cornhill; and Fran./Coggan, in the Inner—Temple—Lane, 1704. となっている。1705年に刊行された訂正第二版においては“... a Native of the said Island, now in London.”以下が次のように変っている。

The second Edition corrected, with many large and useful/Additions, particularly a new Preface clearly answering/every thing that has been objected against the Author and/the Book./Illustrated with several Cut. To which are added, A Map,/and the Figure of an Idol not in the former Edition./London, Printed for Mat. Wotton, Abel Roper and B. Lintott,/in Fleetstreet, Fr. Coggan in the Inner-Temple-Lane,/G. Strahan and W. Davis in Cornhill, 1705./Price Six Shillings.

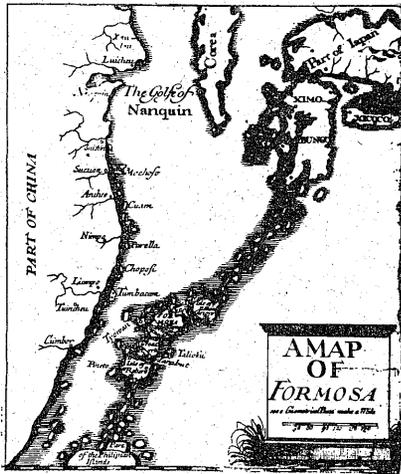
両版ともその巻頭の、ロンドン主教 Henry Comton に捧げた献辞と自序とは初版のまま改訂第2版においても用いられている。彼はその自序の中で、Candidius の著書は勿論のこと、支那で十八年間布教に従事してこのほどロンドンに帰って来たローマ教会の宣教師 Fountenay—Royal Society を皮切りに彼は数回に亘り話を交している—が、Psalmanazar が近く台湾についての本を書く筈で、その本の中にはジェスイットに対する非難が遠慮なくぶちまかれるそうだとの噂をきいて、Psalmanazar の信用を失わさせようと、懸命に有ること無いこと騒ぎたてているが、それにはこのラテン語の句をもって答えようと、

お得意のラテン語を引用している ...“Parturiunt montes, nuscetur ridiculus mus” [大山鳴動鼠一匹]とでもいうところであろう。ただでさえ説明のしにくい異国の風習をたどどしく何とか理解してもらおうと語る Fountenay と、すでに自分の脳裡に自分の空想の赴むくまに作りあげた台湾について豊富な語学を駆使しながら滔々と喋りまくる Psalmanazar との討論では、どちらに軍配が上ることになるか、いわずとも明らかである。この自序に書かれているようにに、Fountenay が馬鹿げたことをいったのかどうか、甚だまゆつばものである。長くなるので引用は避けるが、お志しのある方は自分でお読み頂きたい。この Psalmanazar の本の内容は二つに分れている。初版本では、その第一部とでもいうか、先ず台湾の高官の家に生れた Psalmanazar という少年が家庭教師として雇い入れた de Rhode なるジェスイットの宣教師の口車に載せられて台湾の首都 Xternetsa の父の家から旅仕度に必要な品々と、黄金25ポンドの量目、すなわち、Rochmo と呼ばれる量目 8ポンドの金貨一枚、量目1ポンドの Copan と呼ばれる金貨三枚、それに量目14ポンドに相当する金製品などを盗み出して、父の所有するガレー船、一台湾語では Baleon—に乗って Xternetsa の父の家から 9 英里ほど離れた Khadzey という港を出港して Philippine 群島最大の島 Luconia に向った。こういう調子で彼がここで述べているのは、後に Sluys で Lauder と出会うまでの経歴を潤色しているのであるが、Xaverius が他の耶蘇会士と共に 1549 年に Cangoxima に到着したとか、1616年に日本の天皇は「踏絵」を行なわさせてキリスト教を禁止した—実際には寛永五年からであるからこれは十二年ばかり早すぎる—とか、やや実際の歴史に近いことを書いて

ている。Lauder に見出されてから後の部分になると、殆んど Jesuit 教義に対する批判のみになってしまうのであるが、これは英国教会に受け入れられ易くするための事前工作であろう。Transubstantiation だとか、Cno-substantiation とか盛んに神学上の用語を振り廻しているが、どうも三百代言的論法でとてもまともに読めたものではない。何のかのといったところで、本心は英国教会に受け入れられるようにするための工作なのであるから、てんで面白くないのである。とにかくジェスイットが旧教を受容しない Psalmanazar を如何に苦しめたかさえ英国社会に訴えれば、それで目的は達せられるのである。結局その通りになった訳だ。勿論、この Psalmanazar の改宗論は Innes の差し金であることはいうまでもない。それだけではなく宗論の内容もまた彼の理解した範囲内のものである。しかしこのような程度のものが、英国教会の免罪符の役割を果たしたとは、筆者など、これから少し暇を見つけて、英国教会史でも調べてみたくなつくくらいである。さて本稿の目的たる台湾に関する記述は、あたかも本書の第二部とでもいうかのように、本書の 145 頁から稿を改めて書かれている。“A description of the Isle Formosa. By George Psalmanazaar” というのがその表題である。初版本の内容は、本文三七章、それに彼の Avignon から Rome への旅の項が追録されている。1705年刊行の改訂第二版では、本文四〇章と結語からなっているが、これは初版本第四章「台湾の宗教と祭事について」を二つに分けたり—内容は殆んど変りないのであるが、多少の字句の修正は見られる—したので、章数が増えているだけである。その構成を見ると、第一章「本島の位置、緯度、及び地方区分について」以下—とにかく 37章もあるので、章題だけ羅列しておくこと

にするが—「本島に起った革命」「政体と皇帝 Meryaandanoo 制定の法律」、「台湾の宗教と祭事」、「断食日」、「祭事の行事」、「僧侶の選任」、「太陽、月、及び十の星の崇拜について」、「拝礼の仕方」、「子供の誕生時の儀式」、結婚又は Groutacho について、「葬礼の儀式」、「靈魂についての考え方」、「僧服」、「台湾の人々の風習」、「台湾人とは」、「各身分別による服装」、「都市、町、家屋、宮殿、城」、「自給物資と必要輸入品」、「度量衡」、「迷信」、「疾病とその治療法」、「王、副王、軍司令官、僧侶、その他高官の給与」、「果物」、「常食物」、「英国には見られない動物について」、「言語、附けたり、著者訳台湾語主への祈り、使徒信条、十戒の対訳」、「船舶」、「通貨」、「兵器」、「楽器」、「子弟の教育について」、「日本と台湾における技芸について」、「副王の盛大な鹵簿について」、「1549—1616年間に亘るジェスイットの日本布教の成功、また、1616年のジェスイットの大虐殺、キリスト教禁止令」、「オランダ人の来日と彼らのやりくち」、「日本と台湾に潜入しようとするジェスイットの新たな布教のやり方」、以上各章の題名だけ挙げてみたのであるが、彼 Psalmanazar が自分の脳裡に書きあげた台湾を地理的実体に覆い被せるには余りにも緻密かつ几帳面にすぎることには呆れるであろう。どうも彼には変な几帳面癖があって、Oxford の学寮にいた間にも、彼は Xt Church に住まわされたのであるが、当時の管理人 Topping によれば「あの Salmanezer は学寮に手帳を残していったが、それには、王室又はその代理人から交附された金の収支明細が丹念に書かれていた」といっているのである。それはさておき、この 37章に分けられた項目を一つ解説していたのでは大変であるから、興味のあるものだけを挙げるに止めた。そこで第一章「本島の位置、緯度、及び

地方区分について」に移ろう。「住民は台湾語にて Gad-Avia 即ち美しき(Gad) 島 (Avia) と称し、支那人は Pac-Ando と呼ぶ。南北70リーグ、東西15リーグ、の大きさを持ち、五つの島からなり、うち二つの島は Avias dos Larnodos 即ち海賊島と呼ばれ、第三の島は Great Peorko、第四の島は Little Peorko と呼ぶ。第五の島はそれらの中央に位し、Kaboski 即ち主島と呼ばれ、長さ一七リーグ、幅一五リーグ、厳密には本島を指して Gad Avia 又は Formosa と称するも、爾今これらの総称として Formosa と呼ぶべく、このこと心得られて本書を読まれたし」。Psalmanazar の空想裡に書き出された台湾と現実の台湾とを比較してみてもはじまらないのであるが、彼の述べている台湾とはどういう台湾なのか。この Kaboski と彼の称する Fomosa の主島が実際の台湾本島に仮托したものとすると、甘藷に似ている実際の台湾本島がまるでじゃが藷みたいになってしまう。1599年オランダ人 Jan Fuygen van Linschoten の著した東亜細亞地図によれば、台湾の位置に



第2版本に載せられた台湾の地図

瓦の破片のような形をしたものが三つ並んでいて、北の方の島には「I Famosa」と記してあるが、下の方の二つの島には「Lequeo pequeno」と記している。小琉球というわけである。この琉球という名称は現在の琉球とは無関係なのであるが、一時、台湾附近をそのように呼んでいたことがあるらしい。本書で「Avias dos Lardonos すなわち海賊島と第一、第二の島を呼んでいるところを見ると、どうも澎湖諸島が彼の想念の中にあっらしい。事実、澎湖諸島は支那の南岸をあらし廻っていた日本の倭寇の根拠地でもあったし、またポルトガル人がはじめて上陸したのも現在の澎湖諸島であったし、また1603年にオランダの Wybrand van Warwijck が媽官澳(馬公 Eyland Piscadore) に暴風をさけて艦隊を入港させたのが、そもそもオランダがこの地域を知ったはじめてであるといわれている。察するところ、Psalmanazar の頭にはこれらがごちゃごちゃに入っていたのでもあろう。流求、瑠求、琉球などこの地域の名称の考証をはじめたらそれこそ大変だから、ご免こうむることにする。第二章に移ろう。第二章は「本島に起った革命」ということになっている。曰く、「年代記によるに彼此200年ほど前までは台湾語にて Bagalo と呼ぶ王の治むるところにして、都市町村ごと二、三名のものを選り、代議政をとり、前記島々には Tano と呼ばれる知事を置きて行政を委ねたり。しかるに約200年ほど前、本島はタタール王の侵略するところとなり、タタールの治世は三代に及びたるも、第三代目の王たるや暴逆あくなき、しかも宗教を改革せんとするに至りては、遂に島民すべての叛乱起り、血なまぐさき闘いのち島外に駆逐せられ正当なる王の復位するところとなりたり。その治世70年に及ぶたるも、その間歐人すなわち蘭、英両国人来島し交易盛

大を極めたり。なかにも Great Peorko におけるそれは盛にして蘭ここに Tyowan と称する屯所を設けたり、たまたまシナ人本島を掠めんとて攻略し来たるも、闘うこと数年にして、遂に敗走せしめられたり。しかるにこの時蘭人は裏切りてシナ人に加担したるため追放、更に来島を禁ぜられ、Tyowan の屯所も破壊せられたり。……彼等本島にて求むるところを得ざるときは、はるばる Japan の Nangasaque なる島におもむけり。これらの事変起りたりと雖も Formasa にては外国に侵さることなく独立を保ちいたるも、Meryaandanoo 先ず悪逆を以て Japan を奪い、次に詭計を以て Formasa を奪うに到れり……」こうして甚だ珍妙な日本史の記述がはじめられる。今少し続けて見よう。「Meryaandanoo は本来シナ人なるも若くして日本に渡り、某高官の手蔓によりて皇帝 Chazadijn の宮廷に卑しげなる役に即きたるも……後には Carilhan 即ち軍の総司令官に経昇りたり……」このあと、この Meryaandanoo が帝位を篡奪し、つづいて時の Formosa の王に偽りの書簡を送って遂に Formosa をもその治下に置くに至る次第が述べられるのであるが、北歐ザーガ、エッダによく見られる王位篡奪のモディフィケーション—Psalmanazar が Shakespeare の Hamlet を読んでいなかっただとはどうも考えられないのであるが—にしか過ぎない。Formosa の攻略方法に至っては、これはまた何のことはない Iliad の Troy の馬そのままの手段を用いている。ただ馬が彼の場合には大きな輿のようなものになっているだけのことである。Royal Society で、また事務総長招待の晩餐会で、また Oxford の学寮に過ごした六か月間に何回となく出席して行なった講演会などでも、ほぼ同じような事を話したことであろうのに、何故英国の社会では、との疑問が起るのである

が、ここで当事の英国社会—とにかくスノッパリが横行していたことは Dickens の皮肉からも十分に推察できることではあるが—の名誉の爲にも、先に書きもらした点を補足しておきたい。それは Psalmanazar の話をきいた識者の中には、いち早く、彼の話はどうもほんとはなさそうだと気がついた人々が少数ながらいいたのである。それはハリー—慧星の発見者、Edmund H. Halley 博士をはじめ、Mead, Woodward などという当時一流の学者たちであるが、一彼らの声も一般の俗耳には入り難かったということなのである。ところで次の第三章「政体……」の項に入ると恰かも封建制の下で幕府に諸大名が従属していたのと同じような体制が述べられている。即ち皇帝に従属する Angon 又は Bagalo と呼ばれる25名の王と、Bagelander と呼ばれる8名の副王、それに日本の参勤交代—1635年、即ち徳川家光の寛永十二年に制度化されているが—に似た制度に就いて書かれている。第四章の「宗教」の項になると Japan には三つの宗教があって、その一つは偶像崇拜の宗教で、国都 Meaco にある Amida と称する寺院には黄金製1000体、銀製1000体、真鍮製1000体、それに石又は木製500体の偶像が奉られているといっている。第二のものは一神教、第三のものは無神論とべきものである。ところが Formosan の信仰は彼らの聖典 Jarhabadiond (神に選ばれし土地)によれば彼らは900年前までは宗教を持たず、ただ太陽、月、星を日夜崇拜していただけであったが、あるとき二人の予言者 Zeroaboabel, Chorhe Mathcin なる二人の予言者に神の啓示があって、礼拝堂を造り祭壇に九歳以下の童子二万人の心臓を燔祭として捧ぐべしとの神託なので、Formosans はこれに驚き、この二人の予言者を荒野に追放したところ、天罰たちまちに下るといふありさまで、いた

くその非を悔い、神はあらためて神と彼らの仲介者として、Psalmanazar —この著者と同名であるが—という予言者を送りたもうた、云々と述べている。これもまた旧約と黙示録とをこね合せた上につくりあげたようなもので、到底そのまま肯定されるような出来栄ではない。大体においてPsalmanazarのこの本は、以上第四章までここに紹介したような調子なので、初版本第五章以下については省略することにした。というのは、1705年に出た改訂第二版の自序第二において、彼は当時色々と世人から疑問を表明された諸点について応答しているの、その主だったものを挙げれば全体の調子も大体においてつかめるからである。大分長くなったので早速先きを急ぐことにする。この改訂第二版には“Part of Japan”と書かれた本州らしきものの半分と、恐ろしく大きな島の散在している瀬戸内海と思われる海を隔てて長方形に近い形をした“Xicoco”が横たわり、その西に“Xima”, “Bungo”と書かれた妙な形をした九州があり、その南端から点々と一直線に小さな島々がつづき、その先きに、じゃが蒔とそっくりの形をした“Isle of Rovers”, “Little Peorko”, 次に“Formosa”—この“Formosa”の中には Khadzey, Xternetsa, Bignoの三つの市名が見える—“Great Peorko”, 次にもひとつ“Isle of Rovers”, その下に“Part of the Philipian Islands”としてフィリッピンの一部がすまなく小石をならべたような島つづきのおしまいに書かれた“Formosa”の地図が一枚入れてある。それに第二版では「悪魔崇拜について」という項目が第十五章として加えられているが、その悪魔像—まるでMedusaをTotem Poleの上にくっつけたような—の挿画が入れられている。この改訂第二版に自序第二を入れた理由として彼は以下のように述べている。「本

書の初版は忽ちに売り切れてしまった上、さらに求める声も高いので、書肆の方から、著者も記憶を新たにして、補足すべきところは補足し、またこの本と著者に向けられた容赦のない批評家たちの反論に答えるべく再版してはとの要望があったのであるが、書肆としては本の売れ行きの障碍となるようなものを取り除こうと努めるのは無理ないところとしても、自分としてはこのような屁理屈やどもにかれこれいわれる弱みはさらさらしない。しかし、煩わしさをさけるために、この際、疑い深い紳士方にお答えすることにする……」と大上段に振りかぶっている。それで、Objection と Answer—質疑応答の形でこの自序第二を書いたのであると断っている。そして、「……この二版において校訂者は一字一句と雖も原文を間違えてはいない。今や、わたしは敢えてこういおう。ピラテと同じく、自分が書いたものは、書いたのだ、と」と、大見得を切っているのである。ところで、彼がここに取りあげている Objection 質疑は25項目に及んでいるのであるが、これもまた筆者の読んだところでは、必ずしも実際に指摘された疑問点とは大分違っているようである。と、いうのはこの質疑なるものが甚だ幼稚なのである。少し例を挙げてみよう。

- O. 1 : 貴下は十九歳で Formosa を離れ、以来六年間欧羅巴にいられたとのことであるが、その若さでしかも永年国を離れていながら、それほど貴国の風習に詳しいとは思えないのであるが？
- A. 1 : それは我々インディアン—これは East Indies から連想使用されたものであろう—を知能劣等ときめておられるからであらう。貴国の上流階級の教育も十分に受けた青年が、わたしが台湾についてお話ししている

ほど、英国について話しが出来なかったとしたら、その方がよっぽど不思議ではありませんか。

O. 13 : 貴下の Formosa についての説明は他の人たちの説明とはまるっきり違っていて甚だ信頼し難い。貴下は Japan と Formosa との距離は200 リーグといわれる。他の人々は、140 または 150 リーグ、160 といっている。Luconia からは 100 リーグといわれるが、他の人々は50から60、または80リーグの距離といっているが。

A. 1 : わたしが間違っていると非難している人たちもそれぞれ違っているではないか。

A. 2 : わたしが Formosa を離れるときは経度や緯度についての知識は持っていなかったの、正確かどうか断言は出来ないが、旅になれた同国人から聞いたままのことを書いてだけである。

O. 14 : 貴下の “Historical description of Formosa” は他の人びとのとは、大変な違いかたであるが、貴下に反対の人々があれほど多いということは、貴下の方が間違っているのではないか。

A. 1 : 公平な人であったら、そのような違いこそわたしの説明が正しいことの証しだと認めるだろう。世間を馬鹿にして、わざわざ自分を Formosan だと見せかけようと思うならば、一番簡単なことは、例えばCandidiusが書いている通りのことを、それがどんなに事実と違っていても、そっくり繰り返すことだろう。そうすれば世間はなるほどと思うだろう……。

こういう問答が繰り返されている。質疑も質疑なら、応答もまた応答というべきで、“What I have written, I have written” で押し通している。Meryaandanoo が殺害した話しは可笑しいではないか、信じがたい、と疑問を示されると、英国でも Charles the First が自分の宮廷の前で殺されたではないか、と反論するという具合である。自分の造りあげた虚構の世界に一步でも入れさせまいという気構えである。余り長くなったのでここいらで筆をおくことにするが、この度この Psalmanazar の初版が本館で準貴重本に指定されることになったのを機会に、紹介してはみたものの何か、ほろ苦い感じがするのである。何といってもこの本は英文学史の本道からは大分はなれた小徑に生えたどくだみのようなもので、白い花には多少の可憐さがあるとしても、所詮、その悪臭を消し去ることは出来ない。ただ、筆者にとっては、この本の紹介に当って、嘗て興味を持ったことのある十八世紀前後の英国社会史や、日本における切支丹布教史、それに台湾に関する資料など、再び読み直す契機となったことである。最後に British Museum の Catalogue の中からこの本の仏訳と Amalvi の反論の書名だけでも挙げておくことにする。

(1) Description de L'île Formosa en Asie... Dréssée sur les memories du Sieur G. Psalmanazar, natif de cette île avec une... relation de ces voyages... et des raisons qui l'ont parté à abjurer le Paganisme. Par le Sieur N.F.D.B.R. Amsterdam. 1705.

(2) Eclaircissemens nécessaires pour bien entendue ce que le Sr. N.F.D.B.R. dit être arrivé à L'Ecluse... par rapport à la con-

version de Mr. G. Psalmanazar,
 Japonais dans son livre intitulé
 Description de l'Ile Formosa. 1706.

(よしだ・くにすけ：参考
 書誌部アジア・アフリカ課
 主査)

The Formosan Alphabet

Name	Power		Figure	Name
A ^m	A a ao		ア I I	ア
Men ^m	M m̄ m		メ J J	メ
Nen ⁿ	N n̄ n		ネ U U	ネ
Taph	T th t		テ F F	テ
Lamido	L ll l		レ F F	レ
Samdo	S ch s		セ S S	セ
Vomera	V w u		ヴェ V V	ヴェ
Bagdo	B b ts		ベ T T	ベ
Hamno	H h̄ h		ヘ H H	ヘ
Pedlo	P pp p		ペ P P	ペ
Kaphi	K k zc		ケ K K	ケ
Onda	O o ω		オ O O	オ
Ilda	I y i		イ I I	イ
Xafara	X xh x		エ X X	エ
Dam	D th d		デ D D	デ
Zamphi	Z th z		ゼ Z Z	ゼ
Ephi	E ε η		エ E E	エ
Faudem	F ph f		フェ F F	フェ
Raw	R rh r		レ R R	レ
Gomera	G ε j		ゲ G G	ゲ

T. Slaters

Psalmanazar のいわゆる台湾語
 アルファベット

レファレンス事例 1

電子計算機と法に関する邦文文献目録（海
 外よりの問合せ）

〔回答〕

機械検索のためのプロジェクトに関するも
 のは含めたが、計量法律学のうち、裁判の行
 動分析・予測や法と記号理論など電子計算機
 の法の分野への応用のための基礎理論に関す
 るものは除いた。これらについては、伊大知
 良太郎・水田 洋・藤川正信編「社会科学ド
 キュメンテーション」(丸善株式会社 1968年
 刊)の付録に掲載されている「計量法律学に
 関する文献リスト」(戸村和夫氏作成)を参考
 にされたい。

Baade, Hans W. (バーデ) 編 ジュリメ
 トリックス 早川武夫・碧海純一編訳

日本評論社 1969 261 P

はしがき (ハンス・バーデ 碧海純一
 訳)機械による正義(ジョーゼフ・スペン
 グラー 野村好弘訳)サイバネティクス
 とソヴィエト法学(ジャンギル・A・ケリ
 モフ 碧海純一訳)リーガル・リサーチ
 の利器としてのコンピューター(ウィリ
 アム・エルドリッジ サリー・デニス 淡
 路剛久訳)裁判官の態度と投票行動一連
 邦最高裁判所1961年開廷期(グレンドン
 ・シューバート 早川武夫訳)判決分析
 における連立方程式とブール代数(フレ
 ッド・コート 竹内保雄訳)司法過程の
 数量的分析一実際の・理論的応用の若干
 例(シドニー・アルマー 米倉 明訳)